

海外研修前後における異文化間感受性の変化

戸 田 登美子・丸 光 恵

Changes of Cultural Sensitivities of Pre and Post of the Study Abroad Program

TODA Tomiko and MARU Mitsue

抄録：近年の医療におけるグローバル化に伴い、本学では看護専門職英語運用能力と国際感覚の涵養を目的とした海外研修を行っている。本研究の目的は、看護学生の研修前後における異文化間感受性の変化を明らかにすることである。海外研修に参加した7名のうち協力への同意及び有効回答が得られた5名を対象に、日本語版異文化間感受性尺度を研修前後に測定し、インタビュー調査を行った。同尺度は得点が高いほど異文化間感受性が高いことを示し、研修前の平均点は78.4点、研修後の平均点は82.8点であった。研修前の得点の高さから海外研修参加者は元来外国や外国文化に関心が高いことが明らかとなり、研修後では得点が上昇した者と下降した者とにわかれた。その理由として、研修中の体験の意味づけや相手の価値観に立脚したとらえ方が異文化間感受性に影響することが考えられ、海外研修における異文化間感受性を高める教育的アプローチの必要性が示唆された。

キーワード：異文化間感受性、海外研修プログラム、看護教育

I. はじめに

近年、国際看護学が広く教授されるようになり、蛭田(2017)は6割近くの看護系大学において海外研修が実施されていると報告している。一方、Kuwano(2016)は、看護師の異文化間感受性の低さが看護の自律性を下げる最大の要因と述べており、高い異文化間感受性を持つ看護師の育成が求められている。本学看護学科では看護専門職英語運用能力と国際感覚の涵養を目的として、2015年より海外研修を実施しており、看護学生の海外研修前後における異文化間感受性の変化について調査したのでここに報告する。

II. 目 的

本研究の目的は、本学の看護学生の海外研修

の前後における異文化間感受性の変化を明らかにすることである。

III. 方 法

1. 対象者

2017年2-3月に実施したイギリス カンタベリークライストチャーチ大学へのナースングスタディツアー(以下、海外研修)に参加した看護学生7名とした。なお、本研究に同意が得られた7名を質問紙調査の対象とし、インタビュー調査はそのうちインタビューに同意の得られた6名を対象とした。海外研修の概要を表1に示す。

2. 方法

自記式質問紙調査を海外研修初日及び最終日の2回実施し、その後、海外研修終了後1ヶ月以内にインタビュー調査を行った。インタビュ

一調査は、プライバシーの守れる個室にて行い、要した時間は1回30-50分であった。なお、インタビュー調査は、内容を逐語録に起こして対象者ごとに概要をまとめ、研究者2名で対象者の発言を基に質問紙調査と合わせて内容を分析した。

表1 海外研修の概要

I. 目的
1. 英国における歴史・文化・生活習慣等について、講義のみでなく留学生生活全体を通して体験的に学び、国際感覚を涵養する。
2. 講義・演習および留学生生活を通して、大学教育および生活に必要な語学力全般について向上を図る。
3. 英国の大学における看護教育を通して、英国の医療制度・看護教育・看護実践について理解を深めると同時に、専門職英語運用能力の強化を図る。
4. 1-3. を通して、日本人看護学生としての自らの学習課題を見出す。
II. 学習日程
2017年2月27日(月)から3月10日(金)
III. 研修プログラム
午前 英語レッスン
午後 講義 イギリスの看護や職業規制について 現地学生との共同演習、病院・ホスピス・キャンパスの見学等

3. 調査項目

質問紙調査は、日本語版異文化間感受性尺度(Intercultural Sensitivity Scale: 以下、日本語版ISSという)22項目、大学以外で外国人と会う機会及び得意な外国語の有無、渡航経験等に関する自作の項目を含む計34項目とした。なお、ISSは2000年にChen & Starostaによって開発された異文化に対する感受性を測定する尺度で、Interaction Engagement, Respect for Cultural Differences, Interaction Confidence, Interaction Enjoyment, 及び Interaction Attentivenessの5つの下位尺度の全24項目からなる(Chen, 2000)。各項目を「全く当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」の5件法で測定し、得点が高いほど文化差に対する肯定的な感情が高いことを示す。2016年に鈴木がISSを翻訳し、翻訳版の妥当性、信頼性の検証を行って原版24項目中2項目を除外し、I. 異文化への肯定的感情、II. 異文化へのアンビバレントな感情、及びIII. 異文化への否定的感情の3つの下位尺度の全22項目で構成される日本語版ISSを作成した(表2鈴木, 2016)。

異文化の感受性を測定する他の主な尺度に、

表2 日本語版異文化間感受性尺度(日本語版ISS)

I. 異文化への肯定的感情
私は、文化的に異なる人々とかかわるとき、できるだけその人について知ろうとする。
私はたいてい、自分と文化的に異なる人とかかわるとき、肯定的に対応している。
私は、文化的に異なる人々に対して気遣いをする。
私は、文化的に異なる人々の振る舞いや慣習を尊重する。
私は、自分と文化的に異なる相手との間にある違い(差異)について、楽しめる。
私は、文化的に異なる人々の価値観を尊重する。
私は、文化的に異なる人々とかかわるとき、うちとけた感じでありたいと思っている。
私は、自分とは文化的に異なる人とかかわっているとき、その人が伝えようとしている小さな事にも気を配る。
私はたいてい、自分と文化的に異なる相手に対して、言語的、非言語的に自分の理解を示す。
私は、文化的に異なる人々に対するある種の印象(偏見など)を持たないようにしている。
II. 異文化へのアンビバレントな感情
私は、文化的に異なる人々とうまくかかわる自信がある。
私は、文化的に異なる人々と、うまくかかわれると確信している。
私は、文化的に異なる人々とかかわるとき、緊張しやすい*。
私は、文化的に異なる人々を前にすると、話しづらいと思う*。
私は、自分と文化的に異なる人々と関わらなければならない状況をできるだけ避ける*。
私は文化的に異なる人々とかかわるのが楽しい。
私は、文化的に異なる人々とかかわることが、好きではない*。
III. 異文化への否定的感情
私は、文化的に異なる人々に対して、がっかりすることがよくある*。
私は、文化的に異なる人々は、心が狭いと思う*。
私は、文化的に異なる人々の意見(考え)を受け入れられないだろう*。
私はしばしば、文化的に異なる人々とかかわることは、自分にとってあまり役にたたないと感じる*。
私は、自分の文化は他の文化よりも優れていると思う*。

*のついた項目は逆転項目を示す。

Hammer 及び Bennett が 1998 年に開発した異文化感受性発達尺度がある。これは個人の異文化に対する認知、感情及び行動の発達度を 6 段階で測定する尺度である。しかし、同尺度に対しては、感受性の複雑な側面を十分考慮せずに一律に段階化することや、個人の感受性が有する可能性を排除していることへの批判が報告されている (Chen, 2000; Perry, 2011)。また、Chen (2000) は、異文化間コミュニケーション能力は認知、感情、及び行動の 3 能力で構成され、その感情的側面を表すものが異文化間感受性の概念であるとしている。そこで、本研究では、対象者の感受性の変化に焦点を当てるため日本語版 ISS を用いた。

インタビュー調査は、1. 外国・外国人に対する印象や考え、2. 海外研修中の外国人との関わりで印象に残っていること、3. 外国人患者への関わりについての考えの 3 項目について尋ねた。

IV. 倫理的配慮

対象者には、本研究の目的や内容、方法及び個人情報厳守すること、本研究への参加は自由意思であり、参加に同意した後でもいつでも辞退できること、参加辞退によって不利益を被らないこと、得られたデータは分析後、学会等で発表予定であること等について、文書を用いて口頭で説明を行った。また、インタビュー調査時には録音及び逐語録作成について説明を行い、同意書を得た者のみに行った。なお、本研究において利益相反は一切なく、甲南女子大学研究倫理委員会の承認を得て実施した (承認番号 2016025)。

V. 結果

質問紙調査の回収数は 7 名 (回収率 100%)、有効回答数は 5 名 (71.4%)、インタビュー調査の協力者は 6 名であった。よって、これらのうち質問紙調査で有効回答を得、かつインタビューに協力を得られた 5 名を分析の対象とした。対象者の背景を表 3 に記す。なお、得意な外国語の有無についての設問には、対象者全員が無しと回答した。

表 3 対象者の背景

	大学以外で 外国人と会う機会	渡航経験
A	無し	無し
B	無し	米国・韓国・台湾 (観光) 英国 (研修)
C	有り	ニュージーランド (観光) カナダ・マレーシア (研修)
D	有り	韓国 (観光) ニュージーランド (研修)
E	無し	インドネシア・韓国 (観光)

1. 日本語版 ISS 得点

対象者 5 名の海外研修前の日本語版 ISS の平均点は 78.4 点 (range: 74.0-86.0)、研修後の平均点は 82.8 点 (range: 78.0-88.0) で、研修前と比較し平均点で 4.4 点の増加がみられた。個々の得点を海外研修前と比較すると、海外研修後に合計得点が 1 点減少した対象者が 1 名、残りの 4 名はそれぞれ 2-8 点増加した。下位尺度別の対象者の得点、海外研修前後の平均点、得点率及び range を表 4 に示す。

2. 各対象者の日本語版 ISS 及びインタビューの概要

1) 学生 A

(1) 日本語版 ISS

海外研修後の日本語版 ISS 合計得点は研修前から 1 点減少した 78 点で、対象者の中で最も点数が低く、下位尺度ではⅢ. 異文化への否定的感情が研修前から 4 点減少し、他の 2 つの下位尺度では 1-2 点増加した。項目別では、「私は、自分と文化的に異なる相手との間にある違い (差異) について、楽しめる」、 「私は、文化的に異なる人々に対して、がっかりすることがよくある (逆転項目)」、及び「私は、自分の文化は他の文化よりも優れていると思う (逆転項目)」の項目の得点が研修前より各 2 点低かった。

(2) インタビュー

①海外研修中の外国人との関わりで印象に残っていること及び研修前後の印象の変化

学生 A はそれまで渡航経験が無く、本海外研修が初回の渡航で、英国に対するイメージは「不思議の国のアリスしか無かった」。

海外研修初日にホストファミリー宅にてホー

表4 日本語版 ISS 得点

	ISS 合計得点		Ⅰ. 異文化への肯定的感情		Ⅱ. 異文化へのアンビバレントな感情		Ⅲ. 異文化への否定的感情	
	前	後	前	後	前	後	前	後
A	79	78	39	40	15	17	25	21
B	86	88	43	45	23	24	20	19
C	78	84	39	41	20	23	19	20
D	75	82	40	40	15	23	20	19
E	74	82	39	41	15	18	20	23
平均点	78.4	82.8	40.0	41.4	17.6	21.0	20.8	20.4
得点率 (%)	71.3	75.3	80.0	82.8	50.3	60.0	83.2	81.6
Range	74.0-86.0	78.0-88.0	39.0-43.0	40.0-45.0	15.0-23.0	17.0-24.0	19.0-25.0	19.0-23.0

ムステイの規則が書かれた掲示を読み、「最後に『ここはホテルじゃないのよ』と書いてあって。怖い」と感じ、「私が受け入れる側だったら、相手の都合を聞いたり、これで大丈夫か聞くとする」など、ホストファミリーの対応で感じた戸惑いと、それに対する自身の意見が聞かれた。

研修中のバディ学生との交流では、コミュニケーション時の相手の対応に「一生懸命聞いてくれたり」、「わかりやすい英語を使ってくれたり、言い換えてくれたりしたので、とてもありがたかった」との発言が聞かれた。一方で「日本では『えっ』という場合、英語では『は?』とか『あ?』なのが怖く怯えており、「その相づちに慣れなかった」と英国人の反応に戸惑ったとの感想も聞かれた。

また、「外国の人は、日本みたいに色々やってくれないと思っていたが、言えばやってくれ」ことを知り、「(外国人が)不親切ではなくて、日本みたいにするのが当たり前ではない」と日英の対応の違いを認識、理解しようとする発言が聞かれた。

海外研修後の外国・外国人に対する印象については、研修前と「変わらず、これが普通なんだと思えた」と話した。

②外国人患者への関わりについての考え

「言葉が通じないのが一番不安。症状が伝わらないのは怖い」、「英語ができれば問題ない」との発言があった。また、患者理解と文化的な配慮については「実際にできるかどうかは置いて、(要望や習慣)をちゃんと知っておくことが重要」だが、「違う文化ということは考えられても自分の中に落とし込めない。他人ごと

になってしまう」と話した。また、「文化に配慮するのは結構難しい」く、臨床では看護師は多忙なため、「患者の要望を聞き、大学で学んだように「その人を理解する(中略)余裕があるのか」などの発言があり、言語で解決できる部分がある一方、患者を理解し文化に配慮した看護を提供することは難しいとの意見も聞かれた。

2) 学生 B

(1) 日本語版 ISS

海外研修後の日本語版 ISS 合計得点が 88 点で、研修前から 2 点増加した。下位尺度ではⅢ. 異文化への否定的感情の得点が 1 点減少し、他の 2 つの下位尺度では 1-2 点増加した。

(2) インタビュー

①海外研修中の外国人との関わりで印象に残っていること及び研修前後の印象の変化

学生 B は以前、英国でホームステイの経験があり、他にも観光で数カ国訪れ、その際に「邪険にされたことが無かった」と話した。その対応について学生 B は、業務だから渡航者にも親切なのだろうと思っていたが、今回の海外研修中に、「全く仕事と関係ない場面でも」バスの乗客や運転手に親切な対応を受けたことから、好意的な印象が一層強まり、「前から親切なイメージがあったが(今回の海外研修で)より、こんなに親切にしてくれるんだと思いました」との発言があった。

②外国人患者への関わりについての考え

「言葉が通じない不安を感じたので、日本の外国人の患者も(日本の医療機関を受診したら)そう思うだろう」、「日本では看護師が英語

を喋れるわけではないので、外国の患者はすごく不安だろうなと感じた」等の外国人患者の言語面の不安について外国人の立場から発言していた。また、適切なケアを提供するために「患者の国の医療制度や知識」、及び「寄り添うための語学力は必要」と語り、また「患者の気持ちに寄り添うという根底は変わらない」と看護の本質についての発言が聞かれた。

3) 学生 C

(1) 日本語版 ISS

海外研修後の日本語版 ISS 合計得点は 84 点で、研修前から 6 点増加した。下位尺度ではⅠ～Ⅲの全ての下位尺度で 1-3 点増加した。

(2) インタビュー

①海外研修中の外国人との関わりで印象に残っていること及び研修前後の印象の変化

学生 C は、カナダとマレーシアに研修旅行に行き、ホームステイの経験もあったことから、「今まで喋った人たちが優しい人たちばかりだったので、外国人に対して怖いという印象は全然無」かったと研修前の印象を述べた。

海外研修中のバディ学生との関わりについて、「普段のお喋りでも、自分の意見として思っていることを話し、ディスカッションでは「常に言葉が出ていて、雰囲気（日本と）全然違う」ことに驚き、「ぐいぐい来る感じだなと思った」が、「私も自分の意見を言うことに抵抗を感じないので、（ディスカッションが）楽しかった」との発言が聞かれた。

また、宗教について、英国人は週末には教会に行くと思っていたが、実際は教会に行かなかったことが「意外」で、信仰心は「日本とあまり変わらない感じなのかな」と述べた。一方で、日本では宗教を話題にせず、「私は〇〇教なんです」と話すと「珍しがられる」が、英国では「自分の宗教について話すことは周りからは何も思われない」ことから「宗教に対する感じ方の差があるのかもしれない」と日英の宗教に対する認識の違いについて話した。

海外研修後の外国人の印象は研修「前とあまり変わらない」と語った。

②外国人患者への関わりについての考え

日本の医療機関を受診する外国人患者の状況を推測し、「受診する時は切羽詰まっていて、

かつ異国の地にいるので、英語で説明できるように」看護師の言語能力が必要と話した。また、「（外国人患者は）医療制度を事前に調べて渡航しないので、入院の経過や入院時に必要なもの」など、医療制度に関する説明が必要と話し、「とても不安があると思うので、心のケア」や「日本は宗教に熱心な人は少ないと思うが（宗教的な）配慮が必要」と語った。

4) 学生 D

(1) 日本語版 ISS

海外研修後の日本語版 ISS 合計得点は 82 点で、研修前から 7 点増加した。下位尺度ではⅡ、異文化へのアンビバレントな感情が 8 点増と、全対象者の中で増加幅が最も大きかった。Ⅰ、異文化への肯定的感情は点数の変化は無く、Ⅲ、異文化への否定的感情は 1 点減少した。

(2) インタビュー

①海外研修中の外国人との関わりで印象に残っていること及び研修前後の印象の変化

学生 D はニュージーランドに研修で渡航し、ホームステイ経験があった。

海外研修中に宗教の話をしたことについて、日本と比べて英国では「何かを信じるのが悪いことだとは思って」おらず、宗教を話題にすることに「そんなフランクに喋っていいのか」と驚いたと話した。一方で、日本では行事毎に関わる宗教が異なるため「自分の宗教を説明するのは難しく」、「自分が無宗教というのを大きく感じ」、「自分にはない部分は、信じるとか、価値観を読み取るのが難しい」と異なる価値観や信条の理解が難しいと発言した。

また、研修全般について日本と英国とは「生活もそもそも違い」、「具体的に知り」、「経験できたことが楽しかった」との感想が聞かれた。

②外国人患者への関わりについての考え

外国人患者へのケアについて「生活者として大事にしている文化や価値観があるので、そこを尊重するのはすごく大事」だと話し、宗教に対しても細心の注意が必要であり、例として「自分たちには、食物ぐらいと思うかもしれないが」、「看護する時にそこには細心の注意を払」い、「その人の気持ちや信じてきたものを

大事にするのは、その人の尊厳を守る意味でも大事」と、患者の価値観を尊重した看護の重要性について語った。

また、利用者同士が死について自由に語っているホスピスを見学し、「(見学前は死について) 喋りにくいことだし、本人の中で静かに考えるのかなって思っていた」が、見学を通じて「(死について) 話す、ディスカッションする場所もある」ことに驚き、「(死について) さらに話して話せたら気持ちもだいぶ違うのではないかと感想を述べた。更に、死に対する認識について日英で「考え方が違うのかもしれない」「死に対する思いを内に秘めているのは、どれだけしんどいだろうと思うと、(日本人には) ディスカッションは難しい」が、「悩みや不安が吐露できる場所」があり、「一緒に頑張っている人がいるといいと思う」と、日本人の特性をふまえて死に向かう人の苦悩をどう癒やせるか考える発言があった。

更に病院を見学し、在院日数の短さについて「地域に帰って急変したらどうするのか」と疑問に思い、術後数日で退院することについて「イギリスの医療制度にリスクがあると思う」と発言する一方、日英の医療制度や看護にはそれぞれ「メリットとデメリット」があり、その違いは「文化、価値観や考え方から来ている」と医療制度や看護に差異が生じる背景について話した。

5) 学生 E

(1) 日本語版 ISS

海外研修後の日本語版 ISS 合計得点は 82 点で、研修前から 8 点増加した。下位尺度ではⅠ～Ⅲ全てにおいて研修後の得点が各 2-3 点増加した。

(2) インタビュー

①海外研修中の外国人との関わりで印象に残っていること及び研修前後の印象の変化

学生 E は韓国とインドネシアに渡航歴があるが、いずれも数日の観光で、英国については「キリスト教のイメージ。お祈り(教会)も全員が行くものと思っていた」と当初の印象を語った。

海外研修中は、洗濯の頻度が週に 1 回であることや、使用した食器を溜めてまとめて洗うと

いった清潔習慣の違いに驚いたと発言した。また、日曜日に店舗が開いていないことに「衝撃」を受け、「日曜に働くことをチャンスと思わないのか」、「文化が違う」と語った。

またある日、帰宅が遅くなった時にホストファミリーに「Don't worry, it's fine」と言われ安心したと話し、日本の「お疲れ様」に相当する表現として「温かい飲み物はいかが?」という表現を教わり、実際にホストファミリーから温かい飲み物を出されたという体験を紹介した。

一方で、日英の反応の違いについて「『意味がわからない』と(ホストファミリーに)しかめっ面をされた時は少し傷つき、「眉間に皺が寄る表情が怖かった」と話した。しかし、「言葉が通じない時にニコッとしてもらえ」たり、「笑顔で対応してくれると」安心感が全く異なり、「この人になら話してもいいかなという気になったので笑顔は特に大事」と語った。

②外国人患者への関わりについての考え

清潔習慣の違いから「清潔の概念が異なるので、ケアをする時に不潔とみなしていいのかよく考えないといけない」や、言葉が通じにくい場合は答えやすいようクローズドクエスションで尋ねることが大切との発言があった。

Ⅵ. 考 察

1. 海外研修に参加した学生の異文化間感受性の特徴

Kuwano による ISS 全 24 項目の日本語版を用いた先行研究によると、全国の日本人看護師 238 名を対象にした平均点は 74.9 ± 9.60 であった(Kuwano, 2016)。今回用いた鈴木 of 日本語版が 22 項目であることを考慮すると、本研究の対象者の海外研修前の合計得点は総じて高かったと言える。その理由として、海外研修の参加者は、元来外国人に関心があったことがあげられる。

下位尺度を見ると、研修より大きな得点変化のあったものと、そうでないものに分かれた。下位尺度Ⅰ. 異文化への肯定的感情とⅢ. 異文化への否定的感情については研修前より平均得点が高かった。しかし、研修後は、Ⅲ. 異文化への否定的感情の変化は他の下位尺度と比して個人差が大きかった。

一方、下位尺度Ⅱ．異文化へのアンビバレントな感情では、研修前の平均得点は他の下位尺度と比して低かったものの、研修後は対象者全員の得点が増加していた。この下位尺度は、自信や不安に関するものである。従って、このような海外研修プログラムの効果は学生の不安を緩和し、自信を高める効果があったと考えられる。

2. 海外研修後の異文化間感受性の変化

1) 海外研修後に異文化間感受性が高まった対象者

海外研修中に対象者は様々な体験に驚き、あるいは困難な体験も経たが、異なる文化をもつ人々との関わりに心を閉ざすことなく、その体験を価値あるものと意味づけようとしたことで、文化差を肯定的に捉えることができ、異文化間感受性が高められたと考える。

例えば医療制度の違いについて、学生 D はそれが「価値観や考え方」といった文化に因るものだと考えたが、Murphy (2007) は、文化のコンテクストの意味を問う行為はコミュニケーション技術の習得において重要だと指摘し、意思疎通において「この人になら話してもいいかな (学生 E)」と心を開こうとする行為についても、他者と信頼関係を構築するものと述べている (Murphy, 2007)。これらの体験及び意味づけをする行為が、関わりの楽しさや自信、ひいては異文化感受性の強化につながったと考える。

2) 海外研修後に異文化間感受性が低下した対象者

研修後に日本語版 ISS が減少した学生 A は、日英の対応の違いに驚きつつ、「(患者の文化や要望を) 知っておくことが重要」と異文化理解の重要性を認識していた。しかし、ホームステイ宅の規則などに怖さを感じ、文化の差異について相手の価値観に立脚して考えることが難しく、「私が受け入れる側だったら」や「他人ごとになってしまう」と自身の価値観から文化差を捉えていた。野中 (2010) は、相手の価値観を自らの価値観と照らし合わせることによって、相手の言動の本質的な部分を見極め、「違い」を受け入れることが可能になると述べてい

るが、学生 A は自身の価値観に固執していたために、文化差を受け入れることが難しく、そのことが異文化間感受性を高めなかった一因と考える。

以上より、海外研修後に異文化間感受性が高まった対象者は、体験を意味づけようとしたことで文化差を肯定的に捉え、高まらなかった対象者は、文化差を相手の価値観に立脚して考えることが困難であったと考える。

3. 異文化間感受性を高めるための教育への示唆

海外研修では、学生は文化差に曝露される機会が多く、日常の生活習慣など様々な場面で文化差に驚くことが予測される。しかし、異文化間感受性を高めるには、学生が驚きや怖さの故に異なる文化をもつ人々との交流に心を閉ざすことのないよう、教員が文化差が生じる背景を学生と共に考え、体験の意味づけをしていくことが必要と考える。また、学生が異なる価値観を排除することのないよう、自らの価値観に固執せず、自己を客観視するよう学生に促すことも必要と考える。

以上より、海外研修に参加する学生に対して、教員は学生が文化差の生じる背景を考え、体験を意味づけできるよう促すことが異文化間感受性を高めるために有用であると示唆された。

VII. 本研究の限界と今後の展望

本研究の限界として、対象者が5名と少なく、1度の海外研修に限った調査であることがあげられる。よって、異文化間感受性の変化が今回に限定されるものか否か、継続調査を行ない、明らかにする必要がある。

しかし、インタビューデータより、海外研修が異文化感受性を高める一定の効果があった事が示唆された。

謝辞

本研究にご協力頂いた学生の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- Chen, G. M., & Starosta, W. J. (2000). The Development and Validation of the Intercultural Sensitivity Scale. *Human Communication*, 3(1), 3-14.
- 蛭田由美, 久保宣子, 山野内靖子 (2017). 看護基礎教育における国際看護学の教育プログラムの開発に関する研究－わが国の大学看護学科における国際看護学教育の実態－. *八戸学院大学紀要*, 54, 39-54.
- Kuwano, N., Fukuda, H., & Murashima, S. (2016). Factors Affecting Professional Autonomy of Japanese Nurses Caring for Culturally and Linguistically Diverse Patients in a Hospital Setting in Japan. *Journal of Transcultural Nursing*, 27(6), 567-573.
- Murphy, S. T., Censullo, M., & Baigis, J. A. (2007). Improving cross-cultural communication in Health Professions Education. *Journal of Nursing Education*, 46(8), 367-372.
- 野中千春, 樋口まち子 (2010). 在日外国人患者と看護師との関係構築プロセスに関する研究. *Journal of International Health*, 25(1), 21-32.
- Perry, L. B., & Southwell, L. (2015). Developing intercultural understanding and skills: models and approaches. *Intercultural Education*, 22(6), 453-466.
- 鈴木ゆみ, 齊藤誠一 (2016). 異文化間感受性尺度日本語版作成の試み. *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*, 9(2), 39-44.